

第32回 「息を鍛え、芯を育む ～子どもの身体感覚を考える～」

第32回は、ミリオンセラー『声に出して読みたい日本語』の著者・齋藤孝さんをゲストにお迎えします。

齋藤さんは、本のタイトルから言語教育の専門家のように思われますが、研究テーマは教育方法・身体論。日本の子どものカラダの危機的状況をふまえ、「生きる力」を育むことについて、お話しいただきます。後半は、おふたりのゲストにもご参加いただき、トークセッションを展開します。

7月13日(土) 13:30開会(16:00閉会予定)

【ゲスト】 齋藤 孝さん(明治大学助教授)

秋田光茂さん(バドミントン園長)

立野由美子さん(AM(国際モンテッソーリ協会)公認治療教師、国際こども学フォーラム事務局)

第33回 芥川賞作家・玄侑宗久さんをお迎えして

第33回は、『中陰の花』で第125回芥川賞を受賞された作家で、臨済宗僧侶の玄侑宗久さんをゲストにお迎えします。慶應義塾大学在学中から執筆活動を始めた玄侑さんは、卒業後、さまざまな職業に就き、27歳のときに出家。その作家活動を通して、現代社会における僧侶の役割とは何かをテーマにお話しいただきます。

7月23日(火) 18:30開会予定

※いずれも……

○会場…應典院本堂ホール

○参加費…会員1,000円(一般1,500円・学生1,000円)

いのちと出会う会

第20回 6月20日(木) 「遺児たちの心に 七色の虹を」

話題提供者

あしなが育英会 伊藤道男さん
濱上 景さん

自死や事故、震災で一瞬に親を亡くした子どもたち。ただでさえつらいのに、偏見や差別を受け、親を救えなかった自分を責める日々。そのつらい体験を乗り越え「つらいのは自分ひとりじゃない」と友との連帯を分かち合う場が「あしなが育英会」です。遺児たちの心の叫びを聞いてあげてください。

第21回 7月18日(木) 「クマの棲める 豊かな森を次世代に」

話題提供者

日本熊森協会企画推進局長 瀬戸悠子さん
クマが山から降りて来て殺される。今、山にはエサがなくなってきています。「むごい!」と叫んだ尼崎の中学生たちが立ち上がり、野菜動物保護のため苦闘し、国をも動かす。スギやヒノキばかりの人工林では、山や森は死んで行き、動物は消え、川も荒廃する。森を守り全生物と共存しなければ人間も生き残れない。

※いずれも18:30開会、21:00閉会

パフォーミングアーツ・ メッセ2002in大阪

「パフォーミングアーツ・メッセ2002in大阪」は、芸能・芸術活動を行う団体を始め、劇場・ホールなどが一堂に会する催し。音楽や民俗芸能などの公演も見ることのできる芸能・芸術の祭典です。

今年も、應典院が参加。多くの方々に應典院を知っていただく、絶好の機会となりそうです。

○8月2日(金)・3日(土)

○大阪国際会議場

【新入会員ご紹介】

(2002年6月8日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○一般会員

【大阪府】

奥村美津子 大阪市天王寺区

○個人会員

【大阪府】

小澤和夫 吹田市

ぎのりえ 吹田市

岐部民子 高槻市

【兵庫県】

佐々木拓次郎 神戸市東灘区

谷口悦子 神戸市灘区

【海外】

Usaburo Sato

サリュ VOL. 32

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2002年6月24日
(偶数月発行)

編集人 池野亮、大塚郁子
川井田祥子

発行所 應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL06-6771-7641
FAX06-6770-3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol. 32

サリュ

フランス語で救いの意



ドイツ映画『トンネル』を見た。東西ドイツが分断された時代、引き裂かれた家族や恋人と再び会うために145mのトンネルを掘る人々を描いた映画だ。時代に翻弄された登場人物たちのドラマは、「人はひとりで生きることなどできない」と語りかけてきた。生まれた国や時代によって大きく様変わりする人生。けれど、人と人の絶え間のないつらなりが国と時代をつくる。私たち一人ひとりの生き方がつながって大きなうねりはつくられる。

2002 . June

第6期総会報告 さらなる飛躍をめざして

満5周年を迎えた應典院寺町倶楽部。自立したNPOへ向けた新体制での運営も、ほぼ1年が過ぎました。
去る5月30日に、第6期の総会を開催。1年間の活動の成果と課題を検証しつつ、さらなる飛躍をめざすことを確認し合う、貴重な機会となりました。当日のレポートをここにお届けします。(出席20名、委任状101名)

第5期をふり返って

総会は午後7時に開会。榛木恵子運営委員長が議長に選出された後、順次、議事が進行していきました。

まず、昨年度の活動をふり返って事務局より、「第5期は新しい運営体制のもと、自立したNPOをめざし活動してきた。とくに新しい事業の展開はなかったものの、従来の事業の充実を図られたと自負している。また、新入会員勧誘に際しては、運営委員の協力を得て一定の成果を上げることができた」との報告がありました。

事業を個別にみていくと、寺子屋トークは開催回数3回と少なかったものの、参加者総数421名、平均すると1回あたり約140名の参加があり、いずれも盛況でした。コモンズフェスタも4回目を迎え、約2000名の参加という活況ぶり。アーツ・プロジェクトをはじめ、モニター・ボランティア、大学との協働、企業の協賛など、多様なセクターによる重層的な「場」を創り上げることができたといえます。舞台芸術祭は、従来の「SPACE×DRAMA」という形態はとらず、「連続提携公演」と銘打って開催。はじめて東京から劇団が参加し、大阪の劇団と交流する場面もありました。

いのちと出会う会は昨年度だけで9回実施。毎回参加する人や、倶楽部に入会してくださる人もいて、欠かせない事業のひとつになっています。

「事務局と運営委員会が連携をとりながら、事業を遂行できるようになってきたと思います。テーマや方向性も明確になり、各事業が会員の方々に浸透し、さらに成熟することを期待します」(榛木さん)。

より充実した主催事業を

その後、秋田光彦事務局長より「各目標にそった従来事業のより一層の充実と、収益事業・会員拡大に向けて取り組んでいきたい」との第6期活動方針が提示されました。

事業案のうち、とくにご報告すべきこととして、まず舞台芸術祭があげられます。西島宏運営委員と事務局が、同事業のめざすものや課題について事前に話し合いを重ね、その内容をふまえて、西島さんより提案がなされました。「従来、多様な分野を取り上げた舞台芸術祭を開催してきましたが、演劇空間として注目を高める應典院との連携で、2003年度からは演劇に軸足を置いて実施します。若手劇団の長期サポートや会員への観劇機会の提供など、倶楽部ならではの試みを新たに展開したいと考えています」。さらに、今年度から広報活動をはじめため、事業費10万円の計上についても提案され、みなさんの承認を得ました。

いのちと出会う会は、石黒良彦さん・名畑孝さんの両運営委員が牽引役になって「倶楽部の顔」といえる事業になりました。毎回、多彩なゲストのお話と小グルー

プに分かれての話し合いが好評です。石黒さんは、「昨年は参加者が14名～35名と、人数に散らばりがありました。お話の後のシェア(話し合い)を考えれば20名以上の参加が望ましく、そのためにインターネットを使った広報活動も積極的にしたいと思っています。これからも実際に話を聞いて感動したゲストをご紹介してゆく予定です」といい、さらなる充実をめざす意欲を感じました。

今年5回目を数えるコモンズフェスタは、「対話」をキーワードに企画を立案。自分とは違う視点や考え方にふれて、多様な価値に気づく機会を積極的に創り出そうと準備を進めています。また、昨年の協賛企業に加え、新たな財源開拓も行う予定です。

会員拡大に向けての課題

新会員勧誘について会員の方から、「目標を立てても、具体的な策を講じないと『絵に描いた餅』にしかならない。昨年度、成果があがらなかった要因を分析す



るなど、なんらかの手だてを考えるべきでは」とのご意見をいただきました。「真摯に受けとめ、運営委員会で協議したい」と榛木議長よりコメント。

その後の交流会で会員の服部隆志さん(僧侶・アーユス関西代表)から、「会員の増加で財政基盤を強化しようとしてもいいのでは? いまの会員数でもすごい実績だし、会員として充分満足のできる活動をしていると思っています。それでも財政的に厳しいというのなら、受益者負担の方向で考えるなど、別の方策を考えてみては。私自身は應典院が特別な寺にならないことを望んでいるし、現状のような活動を続けていってもらえるよう、応援もしています」との意見が。

また、新たに運営委員として参加していただく沖中浩志さん(2002年度のバドマ幼稚園PTA会長に就任)は、「音楽仲間が大勢いますので、表現者を支援する倶楽部の姿勢に共感しています。また、寺子屋トークは“こころ”についてじっくり向き合うよい機会だと楽しみにしているんですよ。三木さんや中村さんと連携して、比較的時間に余裕のできたPTAの方々へ、倶楽部の活動を広めていきたいですね」と抱負を語られました。

財政基盤の強化は大きな課題。一朝一夕に解決する課題ではありませんが、手をこまねいているだけではなく、具体的に努力していきたいと考えていますので、会員のみなさまもご協力をよろしくお願いします。



より広い視野をもって活動を

交流会で扇谷順介会長からは、「地球上では止むことなく、テロや内戦が続いています。とくに宗教戦争なんて私には考えられないことです。私たち倶楽部の活動はささやかなものですが、小さなともしびの一粒になって日本やアジアへ広がり、やがて世界中の平和に貢献できるようなものになれば、と思っています。まずは“私”からはじめること。みなさんのお力を借りて精一杯のことをしていくつもりです。今後ともよろしく願いします」とのメッセージがありました。

運営委員会と事務局との連携を強化し、より一層充実した活動を行っていきますので、会員のみなさまも積極的にご参加ください。

■役員人事(敬称略)

・会 長	扇谷 順介(賛助会員)	名畑 孝(一般会員)
・運営委員長	榛木 恵子(一般会員)	西島 宏(一般会員)
・運営委員	石黒 良彦(一般会員)	三木 康彰(一般会員)
	伊藤 伸二(一般会員)	森栗 茂一(一般会員)
	沖中 浩志(一般会員)	・事務局長 秋田 光彦(賛助会員:應典院住職)
	関浦 照隆(一般会員)	・参 与 秋田 光茂(大蓮寺住職)
	蔦田 夏(一般会員)	・監 査 志野 義治(一般会員)
	中村 幸彦(一般会員)	

深化し、進化するNPOへ…… 公益性・収益性の調和を！

～第6期活動計画・事業～

活動方針

2002年度事業の基本方針としては、新体制2年目となり、各目標にそった従来事業のより一層の充実と、収益事業等、新規事業の具体的な実施を目標とします。

また、自立したNPOへ向け、収益性と公益性の調和のとれた活動の展開を指向し、より多くの会員獲得へ向けて、事業を展開します。

活動計画

(1)各主催事業の充実

よりいっそう他団体やボランティアとの協力関係を深め、人的交流を目的とした、市民文化発信のネットワーク作りを心がけます。

(2)事務局機能の活性化

具体的に主催事業の一翼を担ってもらえる人材の確保をめざします。

(3)運営委員(会)との連携の円滑化

事務局と運営委員(会)が連携を計り、充実した事業の展開を行います。

(4)財政基盤の強化

新会員の獲得に向けた活動はもとより、会員制度の見直し、また団体や事業に対する助成金を得られるように働きかけます。

(5)独自の収益事業の立案・実施

倶楽部の理念に沿った収益事業(例としてコミュニティビジネスなど)、独自の事業の立案と実施をめざします。

事業計画

(1)セミナー事業

①寺子屋トーク

・第31回 2002年4月4日

「仏に会う」

講師：作家・立松和平さん

・第32回 2002年7月13日

「息を鍛え、芯を育む～子どもの身体感覚を考える」

ゲスト：明治大学助教授・齋藤孝さん、

パドマ幼稚園園長・秋田光茂さん、

AMI公認治療教師・立野由美子さん

・第33回 2002年7月23日

「タイトル未定」

講師：僧侶、作家・玄侑宗久さん

・第34回 2002年9月28日

「なにわ・まち暮らしの楽しみ」

ゲスト：作家・森まゆみさん、

大阪大学大学院助教授・渥美公秀さん、

大阪ガスエネルギー文化研究所・弘本由香里さん、

京都大学大学院助教授・高田光雄さん

・第35回 2002年10月

「タイトル未定」

講師：精神科医・斎藤環さん

・第36回 2002年11月30日

「タイトル未定」

講師：文化人類学者・デビッド・K.レイノルズさん

(2)ネットワーク事業

①コモンズフェスタ

○期 間：2002年11月4日～10日

コモンズフェスタ2002では、昨年に続き、アーツの多様な可能性を社会につなぐ「場」の創出を大きなテーマのひとつとしています。アーツと社会、両者の関係をもっとゆたかなものとするために、作家、鑑賞者、劇場を結びなおし、これまでにない出合いのコラボレーション(協働)を試みます。また、大学とのコラボレーションも昨年に引き続き実施、若きコモンズ人の育成にも力を注ぎます。

②舞台芸術祭SPACE×DRAMA2003

「チャレンジ・シアター」

○期 間：2003年7月下旬～9月上旬

舞台芸術祭は、今までの実績をあらためて見つめ直し、舞台芸術活動への支援の形を新たに模索していきます。演劇に限定し、若いアーティストを支援する仕組みを構築、今年度(6月下旬より)より公募を開始し、次年度に実施します。

③いのちと出会う会

・第18回 2002年4月18日

話題提供者：大阪YWCAケアハウス・シャロン千里・佐久間早苗さん

・第19回 2002年5月16日

話題提供者：禅岳寺住職・峰本卓潤さん

・第20回 2002年6月20日

話題提供者：あしなが育英会・伊藤道男さん・濱上景さん

・第21回 2002年7月18日

話題提供者：日本熊森協会企画推進局長・瀬戸悠子さん

・第22回 2002年9月19日

・第23回 2002年10月17日

・第24回 2002年11月21日

※以後の予定は未定。

(3)サポート事業

・市民活動サポート事業については要検討

(4)交流事業

会員同士、また誰もが自由に関われる場を、交流会として年3回開催します。

・夜桜会 2002年4月5日

・お盆のつどい 2002年8月2日

・年忘れ交流会 2002年12月26日

(5)出版広報事業

・偶数月上旬にサリュを刊行

・その他広報活動

(6)会議

①会員総会

5月下旬に開催します。

②運営委員会

年に3～4回開催します。但し、事業毎に運営委員が随時事務局の会議に参画します。

(7)協力事業

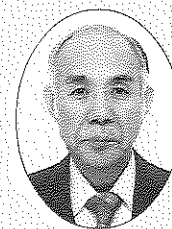
その他、外部団体と提携して行う協力事業があります。広報面等での協力を行います。

(8)その他

・應典院インターネットに情報提供の協力

・應典院年報の配布協力

会員さんからのメッセージ



木村慶次さん(一般会員)

私が寺町倶楽部に入会したのは、4年半ほど前に、第1回目の「コモンズフェスタ」の案内を新聞が何かで見たことがきっかけです。

ちょうどその頃は心理学やカウンセリングを学び、自分の軸足を経済界から他へ移しかけていた時期でした。「最小の努力で最大の効果をいかに獲得するか」という価値判断基準に限界を感じ、他の何かを模索していたときで、「こころの文化創造」を掲げて活動している倶楽部に、新しい時代の方向性を見出したような気持ちになったのです。

寺子屋トークやいのちと出会う会、哲学カフェなど、「こころの豊かさ」を考えるために多方面からアプローチしていることはたいへん有意義だと思いますし、市民自身が草の根の活動で取り組んでいくことは、本物の「こころの文化創造活動」だといえるでしょう。

老後をテーマにした催しには夫婦で一緒に参加していて、最近では「いのちと出会う会」を楽しみにしています。講師の話も楽しみです。途中で小グループに分かれて参加者同士で話し合うのがいいですね。各自の関心の違いがよくわかるんですよ。

寺子屋トークなど、他の催しにも参加する中で多くの学びがあり「今日ただいま、この刹那に念を入れて生活する」姿勢に徹しようとしています。遺言状の作成や遺産相続の手続き、葬儀の仕方についても家族の合意を得ました。あとに残った課題は、①執着心を捨てる勇気と実践、②「許す意志」の表明と実行、③周囲の人に勇気を与える「死に方」についての宗教性・精神性の錬磨です。

また、学ぶだけではなく、積極的に活動に参加してみなお役にお役に立つようなことを、微々たることからでも実践していきたいですね。ただ、私は心臓病でペースメーカーの植え込みをしているので、ご迷惑をかけないようにせねばとも考えています。

今後とも「こころの文化創造」を発展、充実されるよう祈願いたします。

6年目の寺町倶楽部にも ぜひご協力を！ 会員継続をお願いします！！

会も無事終了し、6年目の寺町倶楽部が本格的にスタートしました。

NPO、NGOに代表される市民主体の活動が、今、活発化しています。それは、さまざまな問題を抱える現代社会の中で、先駆性、多元性、批判性、人間性のある活動を通じて、社会に新しいエネルギーを注ぎ、社会を常に柔軟で自己変革可能なものとする活動だからだと思います。

今年度は、新体制となり2年目。各事業の充実はもとより、収益性の向上を目指して、新たな展開を模索していきます。

NPOを支援するもうひとつのNPOとして、より多くの市民活動団

体とのネットワークを広げ、またその活動を支援することを指向しますが、支援する寺町倶楽部があらゆる意味で自立した組織であることが大切になってきます。

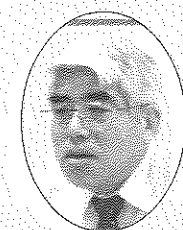
ただ現状では、倶楽部の収入は、そのほとんどが会費収入です。みなさんのご協力があってこそ寺町倶楽部です。

この時期、全会員の約7割の方が会費の更新時期にあたります。更新がまだの方には、更新月のお知らせと振り込み用紙を同封いたします。

引き続きご協力をお願いするとともに、ぜひさまざまなかたちでのご参加をお願いします。

M a k e U p C o m m u n i t y

——コミュニティな人々 坂和章平さん



発会以来の寺町倶楽部の会員で、弁護士としてご活躍の坂和章平さん。70年代は公害訴訟に参加、80年代は大阪駅前再開発研究会や阿倍野再開発訴訟に関わり、以来、震災復興まちづくりなど、一環して「まちづくり」の問題に取り組んでおられます。まちづくりにおいても、最後に問われるのは市民の自己責任、自己決定。坂和さんの、まちと人に賭ける情熱はすばらしいものです。傍ら映画とカラオケが大好き。應典院での友人のコンサートには、多忙な時間を縫って駆けつけます。

の社会についてもっと発言していったほうがいい。若い人からそういう議論があまり上がってこないのは、不安でもありますね。むろん大人の責任も大きいです。私たちの時代は、大人は若い人の壁であり、ハードルでもあった。だめなものはだめと、もっと大人からも真剣にぶつけていかないと……。若い人に合わせるのが、いい大人ではないです。

そういう意味で、應典院には、大人になってから学ぶことができる学校のような存在であってほしい。昔からお寺は地域の学校であり、知識や情報の発信地でもあったわけですが、特権に守られている間に、いつの間にか墮落してしまった。だからこそ、いまお寺が地域の中でどういう役割を果たすべきなのかを、くりかえし考え、議論し、実践しているのはすばらしい、と思います。

應典院のような学びと実践の場を得て、大人も若者もプロの市民として育っていくことができればいいですね。

根ざしています。たとえば、ゴミの焼却場は私たちの生活に必要なが、自分のまちに来てもらうと困る、というエゴがありますね。権利は主張するが、義務に対しては無責任。権利は際限のないものではなく、義務の履行に応じて制約を受けたり、修正したりするものなのに、そこがまだ理解されていません。

近年、愛媛大学で学生を対象に、4日間ぶっ通しの集中講義をやりました（講義内容は著書「実況中継・まちづくりの法と政策」にて出版）が、キャンパスで若い人と関わって、彼らの自己責任に対する感覚の乏しいことを実感しました。これからどういう時代をつくっていくのかは、若い人自身の責任でもあるのだから、現在

本当はコミュニティとか市民とか、あんまり好きな言葉ではないんですよ。口あたりはいいけど、実はそれをつくっていくためには、市民の高い能力や責任が求められる。そこがまだきちんと確立されていないように思います。

震災後の復興まちづくりにも関わりましたが、確かに助け合いの関係は生まれたものの、それだけで持続的なコミュニティにはなり得ない。それには、自分たちのまちに対する長いスパンの考え方と歴史観が必要になってきます。一人前の市民となるための「学び」がとても重要だと思います。

まちづくりのルールは、結局一人ひとりの市民の、義務と権利に対する考え方に

秋田住職発

應典院 掲示板

4月27日、應典院ができて満5周年を迎えました。

あっという間の5年間でしたが、話題に事欠くことはありませんでした。「お葬式をしない寺」「都市に開かれた寺」「アートやNPOと協働する寺」等々、いろいろなキャッチフレーズが生まれましたが、一言で集約すれば、徹底的に「つなぐこと」にこだわった寺といえでしょう。アートもNPOも、現在の社会に十分に受け入れられた文化とはいえません。何につけたったひとつの価値を尊んできた日本のシステムに対し、両者は「多様」「融合」「協働」といった新しい価値を提出してきました。いずれも異なるものがつながることで生まれる新しい力に、大きな可能性を見つけています。

その結果は、まだ未知数です。しかし、應典院の数々の場からは、確かに既存の会社や学校といった場とは違う、人の育ちと輝きが見られます。社会の変化は、人が世界や他者に出会うことから始まります。「カオスの広場」應典院は、そのつなぎ場を心がけてきたつもりです。

つぎの5年、さらにその後の5年、自立した人々がこれからの社会を、地域をどんな風に変えてくれるか、とても楽しみです。

■新しいスタッフ体制で再スタート！

5周年を機に、今年度より應典院のスタッフ体制が刷新、新たに事務局長に池野亮、ディレクターに川井田祥子が就任しました。池野は主に應典院の運営、管理を、川井田は催事の企画と実施に当たります。

10月には私の大蓮寺住職晋山もあり、今後は運営の軸を新体制に任せていきたいと思っています。ふたりとも新しい立場において、当初は戸惑うことがあるかもしれませんが、どうかこれまで同様、あたたいご支援ご協力をよろしく願いいたします

■寺町挙げての人形フェス 盛況！

恒例となった「なにわ人形芝居フェス」が去る4月8日に開催、下寺町から一心寺まで一帯は3千人の人出でにぎわいました。例年同様、各寺院を会場にプロ・アマ30もの人形劇団が、本堂や庫裏を舞台に人形劇を上演、子どもたちの歓声があふれました。

とくに今年は、下寺町若手僧侶の会である三帰会主催の「花祭り子ども行列」の実施。稚児衣装や法被姿の子どもたち約40名が、大きな張子の白象を曳いて、寺町を練り歩きました。この模様はNHKのニュースでも紹介されました。

■佐々木ゼミが当山を見学

去る5月1日、立命館大学の佐々木雅幸教授のゼミが應典院を訪問、私のミニレクチャーの後、4月からスタートした「詩の学校」を受講しました。3月までインターンとして参加していた来馬司くんが、卒論に應典院を取り上げたのがご縁となりました。地域に密着した参加型文化拠点のあり方に、学生たちから質問が続きました。佐々木教授は、放送大学の一般科目「アーツ・マネジメント」の主任講師も務めておられ、文化政策研究の第一人者。

■大阪の都市文化の掘り起こしを！

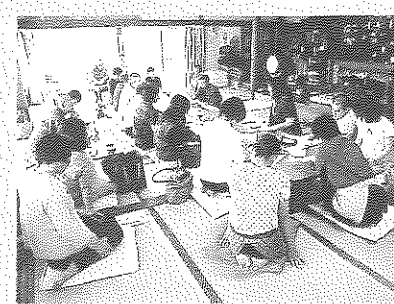
文化のまちづくりの視点から、大阪の都市資源、観光資源を再評価する試みが活発ですが、去る6月6日、大阪ミュージアム文化都市研究会主催のシンポジウム「活動するミュージアムとしての大阪」が應典院で開催、都市計画や観光産業、研究者など150名が集まりました（協力事業）。

同会は、これからの文化によるまちづくりを提起し、豊富な事例を通して、大阪のもうひとつの魅力を創りだそうというもの。当日の会場に選ばれた應典院も、同様に「場の魅力」を醸し出す、と紹介されました。赤レンガ倉庫、アメント、からほり倶楽部、平野郷など、現在進行形の多様なまちづくりが紹介されました。

新たな「葬送」のネットワーク、九州を走る！

最近急速に新しい葬送の分野に参加する機会が増えていますが、5月23日から3日間、NPOエンディングセンターの一行と、九州の活動現場を見学、研修してきました。

23日の熊本では、地域密着型の葬儀社として話題の「自然庵」を見学、とくに、地元の介護・福祉NPOと協力して、生前のケアサービスに乗り出すなど、葬儀を生活支援事業として捉えた確かな視線を感じました。また、25日の大分では、日蓮宗妙瑞寺を



訪問、永代供養墓とエンディングセンターの活動を通して、地域に開かれた寺院のありかたを見ました（写真）。菊地泰啓住職の人柄もすばらしく、ひとつのコミュニティ活動としても将来性を感じました。

同行したノンフィクション作家の井上治代さんからも多くのアドバイスをいただき、実りの多い旅となりました。